

令和5年度（第2回）

みんなで支える森林づくり上伊那地域会議

現地視察資料

- 伊那市 伊那市立伊那西小学校
- 南箕輪村 信州大芝高原
- （参考）10/19(木)「週刊いな」森林税PR記事

令和5年11月27日実施

上伊那地域振興局林務課

※ 本資料の画像の一部は伊那市立伊那西小学校HPから引用しています。

○ 取組の背景

- ・伊那西小学校は昭和25年に開校後、小規模特認校としてH30から新たにスタート（学校林は昭和26年に校舎南に植樹された2,500本のカラマツから）。
- ・伊那西小学校の学びを支える3つの教育活動を屋台骨に「これからの時代に生きる子供たちを育てる学校」として運営。

地域と連携した教育活動…「暮らしの中の食」「食農体験」「地域の方から学ぶ」

一人ひとりを大切にしたい教育活動…少人数をいかして学力向上を図る

林間を活用した教育活動…学校林など豊かな自然の中で学ぶ

○ 主な学校林活動

- ・各学年ごとに特色ある「太陽の時間（総合的な学習の時間）」で学校林をテーマに活動。
- ・全校活動で学校林内の活用や保全活動。

シイタケ栽培（高学年がドリルで原木に穴を開け、全校（みどりの少年団）で駒打ち）

林間マラソンコースの整備

アカマツをマツクイムシから守る活動

○ 森林づくり県民税の活用

R 1 学校林等利活用促進事業（3,021千円）

森林整備0.9ha、歩道整備

R 2 子どもの居場所木質空間整備事業（2,244千円）

屋外施設建設

学校林等利活用促進事業（381千円）

調査用具・整備用具・燃焼器の調達

R 4 学校林等利活用促進事業（497千円）

整備用具・シイタケ栽培用具の調達、指導者費用

R 5 学びと育ちの森づくり促進事業（500千円）予定

整備用具、シイタケ栽培用具の調達、伐採木の製材費

【トピックス】

伊那西小学校学校林は、6年おきに4回に分けて主伐を行い、森林の育ちゆく姿や伐採木の利用を学んでいます。

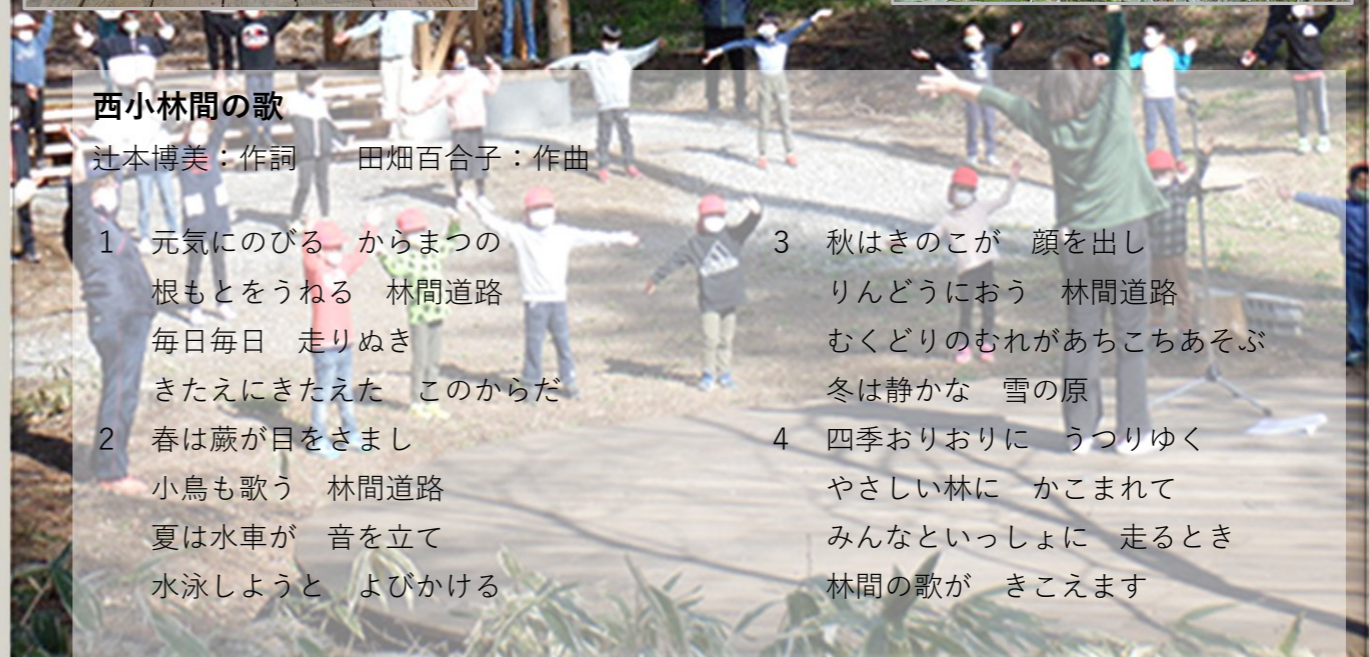
今年度はその2回目の主伐を計画しており、その伐採木は製材・乾燥し学習に役立てます。



西小林間の歌

辻本博美：作詞 田畑百合子：作曲

- | | |
|---|--|
| 1 元気にのびる からまつの
根もとをうねる 林間道路
毎日毎日 走りぬぎ
きたえにきたえた このからだ | 3 秋はきのこが 顔を出し
りんどうにおう 林間道路
むくどりのむれがあちこちあそぶ
冬は静かな 雪の原 |
| 2 春は蕨が目をさまし
小鳥も歌う 林間道路
夏是水車が 音を立て
水泳しようと よびかける | 4 四季おりおりに うつりゆく
やさしい林に かこまれて
みんなといっしょに 走るとき
林間の歌が きこえます |



森林サービス産業活動支援 ～信州大芝高原 森林セラピーロード～

※ 本資料の画像は南箕輪村HPから引用しています。

○ 信州大芝高原の概要

- ・ 明治28年に尋常小学校に赴任した福澤桃十先生が、「村を豊かにし立派な小学校を作りたい」と植林を提案
- ・ 採草地の原野に植林が始まり、昭和24年頃から植林作業は中学生に引き継がれる
- ・ 昭和56年に高原内で林野火災が発生し、残ったものが今の大芝高原
- ・ 現在は様々な施設を整備（図参照）し、村内外から利用者が訪れる場所となっている
- ・ 令和5年度、村役場耕地林務係から林務担当が独立し、「森林デザイン係」として大芝高原内事務所に常駐

【トピックス】

大芝高原のアカマツ林は、マツノザイセンチュウ病による枯損が進んでいます。これから益々進行するであろうマツ枯れに対し、「植える→育てる→収穫する」のサイクルで適切に森林が循環する基本に戻り、50年先を見据えた森林づくりを進めるための大芝高原森林づくり実施計画を策定中です。

○ 森林セラピーの取組

- ・ 2006年4月に森林セラピー基地認定（全国65箇所のうち10箇所が長野県）
- ・ 3つの森林セラピーロードコースは平坦かつバリアフリー
- ・ 森林セラピーガイドが森林セラピー体験を実施（土曜日）

○ 森林づくり県民税の活用

H30 森林セラピー基地等施設整備支援事業（3,445千円）

間伐 2.39ha

R1 森林セラピー基地等施設整備支援事業（2,564千円）

間伐 2.05ha

R2 森林セラピー基地等施設整備支援事業（8,490千円）

トイレ改修 1式、修景林間整備 伐採28本

R3 森林セラピー基地等施設整備支援事業（2,646千円）

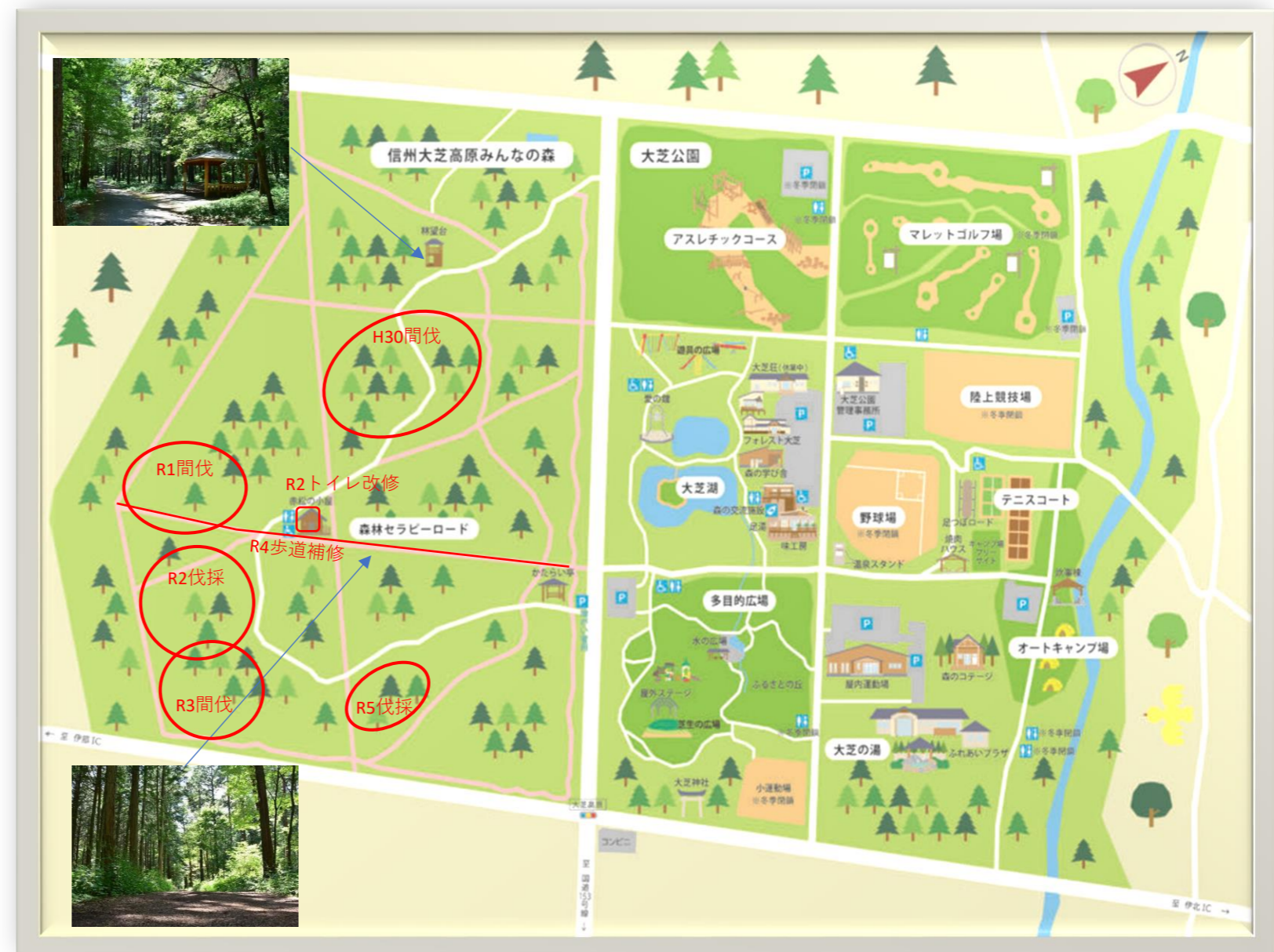
間伐・林内整理 1.2ha

R4 森林セラピー基地等施設整備支援事業（1,567千円）

チップ歩道改修 582m

R5 森林サービス産業活動支援事業（472千円）予定

修景林間整備 枯損木・支障木の伐採



ヒノキやアカマツの間伐と造材が行われている駒ヶ根市の現場で伐倒する浦野さん。木の重心や傾きを見極め、刃を入れる時のまなざしは真剣そのもの



信州の豊かな森林を未来へ

～長野県森林税活用事例紹介・上伊那森林組合の現場から～

長野県で2008年度から導入されている「森林づくり県民税（森林税）」は、本年度から第4期の取り組みがスタート。上伊那地域でも、里山整備のほか森林の若返り促進や林業従事者育成支援など、幅広い用途に活用されています。

「長野県森林づくり県民税」とは

県土の約8割を占める森林を適切に手入れし、次世代に受け渡すための仕組み。2008年度から県民1人あたり年間500円を納税し、森林の多面的な機能の維持増進に活用されています。

本年度から2027年度までの5年間は「森林の若返り促進と安全・安心な里山づくり」「森や緑、木のぬくもりに親しむことのできる環境づくり」「森林・林業活動に取り組み多様な人材・事業者への支援」「市町村と連携した森林等に関連する課題の解決」の四つの柱に沿った施策が行われます。

問・上伊那地域振興局林務課 ☎0265・76・6823

主伐・再造林で森林の若返り

県の林業はこれまで、主に間伐で出た材を市場へ出荷する「利用間伐」が行われてきました。今後は森林の若返りを図るため「主伐（育てた木材の収穫）」と「再造林（育てた苗木を植えて育てる）」の山に苗木を植えて育てる「再造林」への移行が必要とされています。

これは、県内の民有林（人工林）の8割が50年を超えて伐採時期を迎えている一方、20年以下は1%と更新が進んでいないことに起因しています。



高遠町藤沢の片倉財産区有林（2023年9月）。植栽（写真下）から1年余りでの苗木の成長ぶりが分かります



伊那市高遠町藤沢の片倉財産区有林では2018年度から、委託を受けた上伊那森林組合が主伐・再造林を行っています。約25センチで樹齢60～70年になっていたカラマツを伐採し、翌19年～22年度に計3回、5万本のカラマツ

次代を担う人材育成

上伊那森林組合では昨年4月から、高卒で入社した新人職員2人が働いています。浦野樹さん（19・伊那市美郷）と前田晃輝さん（同・同高遠町）。浦野さんは高遠高校、前田さんは駒ヶ根工業高校出身。二人とも幼い頃から林業に関わっています。

地元出身の若手が奮闘中



浦野樹さん（左）と前田晃輝さん

入社当初は支障木除去を行う特殊伐採班に配属され、支給されたチェーンソーで伐倒後の木の枝払いや造材を

の苗木を植栽しました。5年前に植えた若木は高さ2メートル近くになるものも増え、同組合の吉田康二さんは「林業用語に適切な場所をもつて『適地適木』という言葉があります。ここはまさにカラマツの適地。土壌や日当たり、気候などの条件が生育に『最適』と話します。

「適地適木」で60年後へつなぐ

県内の人工林の約6割を占めるカラマツは近年、世界的な木材不足などにより外材から県産材への代替需要が高まり、合板用に多く利用されています。

また杉やヒノキよりも成長が早いため森林資源循環に最適な樹種であることや、周囲に広葉樹が育ちやすく、生き物も多様になって森が豊かになることから、上伊那森林組合で

苗木に巻き付くツルの除去は1本ずつ作業のため時間が掛かります。その実態を伊那市の有志団体が体験しました



同組合は現在、カラマツの若木の周囲の下草刈りや、成長を阻害するツル植物の除去・ホシシカの食害を防ぐ防獣ネットを張るなどの管理に努め、先人たちが私たちに残してくれたように、60年後に再び、材や薪を切り出せる森林に育てていきたいと話しています。

担当しましたが「道具が重くて腕がパンパンになり、最初はきつかった」と浦野さん。先輩職員の指導の下で懸命に学んだ今は、体力もつき、山林で伐倒までの一連の作業を担えるようになりました。

進路選択時は一人とも家族に「危ないのか」と反対されたそうです。組合では作業前に現場の危険箇所について共有し、伐倒の際は必ず笛を吹いて周囲に危険を知らせるなど手順を確認して安全管理を徹底しています。

「危険を伴うことは確か。常に細心の注意が必要なのも心配していますが、今は家族も応援してくれていて、昼休みに母が持たせてくれる弁当を食べると疲れが吹き飛ぶます」と前田さん。浦野さんも「自然の中は気持ちがいいし、先輩方もすごい人ばかり。狙った場所に手際よく伐倒できるようになりたい」と話します。

県内全体では、林業従事者数は長期的には減少傾向で推移していますが、ゼロカーボンやSDGsの推進に合わせ持続的に森林を管理していくためには、次代を担う人材の確保が欠かせません。県は今年から森林・林業活動に取り組む多様な人材や事業者への支援をさらに強化するとともに、就労環境の整備、職業としての魅力の発信、学校や企業など年代に応じた森林・林業教育にも力を入れていく考えです。